

曲目解説 河野典子(音楽評論家)

◆ジョアキーノ・ロッシーニ Gioachino Rossini (1792-1868)

オペラ《アルジェのイタリア女》より序曲 フルート、ギター、ピアノ

21歳のロッシーニが、ヴェネツィアのサン・ベネデット劇場に急遽頼まれて27日間で作曲したのがこの《アルジェのイタリア女》という2幕のドランマ・ジョコーゾ(dramma giocoso)である。「ドランマ・ジョコーゾ」とは本来は芝居の形式を指し、特徴はそれぞれの幕切れが喜劇性を帯びたフィナーレによって構成されていることにある。

他の作曲家に依頼していたオペラが間に合わないことに起因してロッシーニへの急な依頼となったこのオペラの台本は、1808年にスカラ座で上演されたルイジ・モスカ(Luigi Mosca 1775-1824)作曲の同名のオペラのためにアンジェロ・アネッリ(Angelo Anelli 1761-1820)が書いたものをそのまま流用している。レチタティーヴォと第2幕のハリーとリンドーロのアリア(後者は第2版でロッシーニ自身により書き替えられた)だけは、今では名前もわからない協力者によって作曲されたが、ほとんどはロッシーニ自身の筆による。このオペラでもっとも有名なのが今日演奏される序曲で、30小節ほどのオペラの導入部となる静かなアンダンテに続いてイザベッラの活躍を予感させる小気味良いアレグロとなる。

オペラの主人公は、今はアルジェの総督ムスタファの奴隷となっているイタリアの青年リンドーロを助けるために、船に乗ってやってくる彼の恋人でイタリア女性のイザベッラ。彼女の勇敢かつ機智に富んだ言動が、リンドーロを救い、総督に見捨てられそうだった総督の妻の立場も回復させ、皆が祝福する中、恋人たちはめでたくイタリアへと帰還していく、というもの。ロッシーニがこの作品を「ドランマ・ジョコーゾ」と定義しており、どちらの幕も主演級の歌手たちによる歌唱テクニックの見せ場と聴かせどころが続くフィナーレで終わる。

ロッシーニは早熟な作曲家で、1810年に《結婚手形 La cambiale di matrimonio》を18歳で発表してから、序曲が特に有名な最後のオペラ《ギヨーム・テル Guillaume Tell (ウィリアム・テル)》を37歳で発表して、オペラ作曲家としての筆は置いた。オペラは39作品。その中には現在でも世界中の劇場で頻繁に上演される《セビリャの理髪師 Il barbiere di Siviglia》、《ラ・チェネレントラ La cenerentola》、《セミラーミデ Semiramide》、《タンクレディ Tancredi》などがある。

◆フェルディナンド・カルツリ Ferdinando Carulli (1770-1841)

ロッシーニの《泥棒かささぎ》による幻想曲 フルート、ギター

カルツリはナポリ生まれのギタリストであり作曲家。ほぼ独学でギターを学び1808年にはパリに移住して、400曲近いギター曲を作曲した。彼をもっとも有名にしたのはギ

ターの演奏メソッド Op.27 であり、彼は教育者として高く評価された。その後彼は時代と共に忘れられていったが、20 世紀後半になってジュリアン・ブレイムとジョン・ウィリアムズが彼の二重奏 Op.34 とセレナーデ Op.96 を録音したことによって、再び彼の作品に光が当たることになった。

今日演奏されるのは、ロッシーニが 1817 年に発表したオペラ《泥棒かさぎ La gazza ladra》の序曲をカルツリがギターとフルート(あるいはヴァイオリン)のために編曲した幻想曲である。前述のような楽器編成のみでなくピアノとギター、ギターの二重奏などでも演奏されている。

◆フランチェスコ・デ・サンティス Francesco De Santis (1954-)

プッチーニの《蝶々夫人》のフライ・トリオ フルート、ギター、ピアノ

デ・サンティスは、バーリ県コラートで 1954 年に生まれ、バーリの N.ピッチンニ音楽院で学び、現在は同音楽院のピアノ科で教鞭を執っている。作曲家として、ピアノ曲、交響曲、室内楽の楽曲を多数作曲し、欧米の数々の作曲コンクールでも上位入賞を果たした。また彼はイタリア各地で、ソリストとしてまた室内楽で、ピアノ奏者としての活躍も続けている。

この「フライ・トリオ Fly Trio」と名付けられたプッチーニの《蝶々夫人》のメロディを題材とした作品と、今日演奏される予定のもう一曲のデ・サンティス作品である「タラントリオ Tarantrio」はどちらもトリオ・ロスピリョーゾイのために書かれた作品だが、楽譜が未刊行で、録音もまだ発売されていないため、今日の実際の演奏でどのような作品かをお楽しみいただくことになる。プッチーニ作曲の《蝶々夫人》は日本の長崎を舞台にしたオペラで、アメリカの海軍士官の現地妻となった 15 歳の芸者である(日本に来たこともない外国人が書いた台本なので、不思議な点は多々ある。)蝶々さんが、本国に帰ってしまったピンカートンを彼が去ってから生まれた息子を育てながら待ち続ける。が、ピンカートンは3年後にアメリカ人の本妻を伴って来日し、そこではじめて自分の息子の存在を知る。子供の将来を考えた蝶々さんは息子をピンカートン夫妻に託し、自身は自害して果てる、という物語である。

◆ポール A.ジュナン Paul A. Genin (1832-1903)

ヴェルディの《椿姫》による幻想曲 フルート、ピアノ

ジュナンはフランスのフルート奏者であり、この曲のほかに「フルートとオーケストラ(あるいはピアノ)のための〈ヴェニスへの謝肉祭〉」「フルートとピアノのためのグノーのオペラ《ファウスト》幻想曲」などを書いている。「《椿姫》による幻想曲」も本来はフルートと

ハーブのために書かれたものだが、今回のようにフルートとピアノ、あるいはフルートとギターなどいくつかの編曲版が存在する。ジュナンはフルート奏者だったこともあり、どの幻想曲もフルート奏者に並外れたテクニックと表現力を要求している。

《椿姫 La traviata》は、パリの高級娼婦で肺病を患うヴィオレッタと、彼女に恋するプロヴァンスの青年アルフレード、そして息子を取り返そうとするアルフレードの父ジェルモンで展開するA.デュマ・フィス(Alexandre Dumas fis 1824-95)の自身の経験を元にした戯曲「カメリアの貴婦人 La Dame aux camélias」をベースにして、ヴェルディが作曲したオペラである。

この幻想曲は《椿姫》第1幕、高級娼婦ヴィオレッタのサロンで歌われる有名な「乾杯の歌 Libiam ne' lieti calici (BRINDISI)」のメロディがピアノで始まり、すぐにフルートのヴァリエーションとなる。そののち第3幕で、待ち焦がれたアルフレードが戻ってきて一緒に教会に行こうとしたもののそのような体力がもう残っていないことをヴィオレッタが嘆く「神様、こんなに若くして死ぬなんて Gran Dio! morir sì giovine」の部分に飛ぶ。この部分のヴァリエーションはフルートのテクニックの見せ場となっている。そしてオペラの物語を少し遡り、同じ第3幕でひたすらアルフレードの帰りを待つヴィオレッタのアリア「さようなら、過ぎ去った日々よ Addio, del passato」になる。ピアノによる展開部を挟んで再度「乾杯の歌」に戻り、そこにもう一度「神様、こんなに若くして...」のメロディが織り交ぜられてこの幻想曲は終わる。

◆ルイジ・ジャキーノ Luigi Giachino (1962-)

山猫のステップ...自由な想いをヴェルディのワルツに乗せて フルート、ギター、ピアノ

ジャキーノは1962年生まれ。トリノ音楽院を修了し、作曲と管弦楽法で博士号を取得している。コンサート・ピアニストとして活躍しながら、バレエ音楽や劇音楽などを多く作曲している。この「山猫のステップ Passi Felini」は未刊行の作品だが、作曲者本人が以前、演奏会のプログラムにメッセージを寄せているのでここに再掲する。「2013年のヴェルディ生誕200年に際して、トリオ・ロスピリョーゾイから新曲の委嘱を受けた時に、私はすぐに(訳註:ルキーノ・ヴィスコンティ監督の映画)「山猫 Il Gattopardo」の中で使われていたとても素晴らしく、かつ存在感のあるワルツのことを思い浮かべた。それはヴェルディによる未刊行の作品で(訳註:映画用には「山猫」の音楽を担当したニーノ・ロータが編曲)、私はそれをベースに綿密さと風刺的な和声の遊びと、名人芸的な側面をもつ自由な幻想曲を作曲した。音楽はヴェルディの作品と私が作り上げる部分との間を揺れ動いた。パラフレーズ? そうかもしれない。リストのパラフレーズと比較する必要もあるまい。ただし、細心の、本当に細心の注意を払ったことにより、この曲の原曲の精神は守られ、多分、映画で使われたときのあの輝かしさを取り戻している。」(筆者抄訳)

◆ヴィート・ニコラ・パラディーゾ Vito Nicola Paradiso (1964-)

「アッシジでのオレムス」「作られた音(タランテッラ)」 ギター、ピアノ

パラディーゾは、1964年にプーリア地方で生まれた。演奏家としてはヨーロッパのみならずカナダ、アメリカ、南米各地、日本で数多くのコンサートを開いている。ソロ・ギタリストとしてだけでなく、室内楽演奏者としても多くのグループに参加している。また彼の書いたギター教則本「LA CHITARRA VOLANTE」はイタリアのみならず、世界中で翻訳され使用されており、ギター指導者としても高く評価され、世界各地でマスタークラスを開催している。

「オレムス・イン・アッシジ」のオレムス(Orémus)とはラテン語で司祭が人々に呼びかける「祈りましょう」という言葉であり、「アッシジで祈りましょう」と訳すこともできよう。彼はこの作品をギターオーケストラ用にも編曲し、ソリストとして共演もしている。この曲はハ長調で書かれ、小鳥と会話していたという聖フランチェスコの逸話を思わせるようなシンプルで穏やかな音楽は、聴く人を爽やかなそよ風の吹くアッシジの丘の上にいるような気分させてくれる。

もう一曲のタランテッラのリズムで書かれた「作られた音」の意味するところは *Suoni dei fuochi d'artificio* (花火の音)だと思われる。日本の、六尺玉がドーンと打ち上げられるような花火ではなく、いくつものナイアガラと称されるような花火が次々に点火されて、音を立てながら流れ落ちて消えていくまでの様を模しているような遊び心に溢れた作品となっている。

◆フランチェスコ・デ・サンティス Francesco De Santis

タラントリオ フルート、ギター、ピアノ

前半で演奏された「《蝶々夫人》による Fly Trio」と同様この Tarantrio も現時点では楽譜は未刊行で、音源の発売も待たれるところである。この曲は2010年にトリオ・ロスピリョーヰのためにデ・サンティスが書いたもの。タランテッラ(Tarantella)は南イタリア発祥の速い伝統的な民族舞曲で、ペアあるいは大人数で円になって踊られる。基本的には4/4で書かれているが、6/8あるいは12/8のものもある。またタランテッラといっても南イタリアでも地方によってそれぞれに曲調が異なる。

タランテッラのリズムには多くの作曲家が曲をつけており、ショパンの「タランテッラ Op.43」、ロッシーニの歌曲「踊り La danza」、ピアノを習っていた方ならばブルグミュラー25番のNo.20などが思い浮かぶかもしれない。

タランテッラについては、地名のターラントから来ている、毒蜘蛛のタランチュラに噛まれたら毒を抜くために踊り続けなければならないところから来ている、中世にイタリアで流行した舞踏病 Tarantism から来ているなど諸説あるが、いまだその語源は定かではない。